

2014年7月17日

# 私の博士論文

～博士論文の構成とその後～

武蔵野学院大学大学院

国際コミュニケーション研究科長・教授

佐々木隆

学士論文(文学士) 昭和57年3月

「A Study of *A Scarlet Letter* by  
Nathaniel Hawthorne」(日本語)

修士論文(文学修士)昭和59年3月  
「A Study of *Hamlet*」(英語)

博士論文(英文学(博士))平成13年3月  
「書誌から見た日本シェイクスピア受容研究」

# 学部→修士→博士

米文学(ナサニエル・ホーソー  
ン)

英文学(シェイクスピアの作品  
論:ハムレット)

英文学(日本のシェイクスピア  
受容研究)

# 一般的なシェイクスピア研究

- **作品研究**
- **テキスト研究**
- **批評史研究**
- **演劇・劇場研究**

# 佐々木のシェイクスピア研究のテーマ

## 日本におけるシェイクスピア受容史

- ・日本シェイクスピア協会
- ・日本英文学会
- ・日本英学史学会
- ・日本比較文学会
- ・日本演劇学会

# 研究計画の概要

- 1) 日本シェイクスピア研究  
書誌(単行本・翻訳・注釈・  
学術雑誌・上演史の調査)
- 2) シェイクスピア映画・TV放  
映及びVIDEO、DVDの調査



# 特に佐々木がこの段階で注目したこと

- ・黒澤明のシェイクスピア映画（『蜘蛛巣城』『乱』への注目）
- ・能シェイクスピア、シェイクスピア狂言等への観劇と過去の文献調査（能楽堂の図書室等における調査）
- ・蜷川幸雄を中心に、日本の伝統芸能の要素を組み入れたシェイクスピア劇の観劇と文献調査

# 特に佐々木がこの段階で注目したこと

- ・明治・大正・昭和の日本のシェイクスピア上演史の整理(小劇場を含め東京を中心に上演された記録の整理と劇団の交流活動)年間100～200本程度の上演・映画を4～5年間観劇を続ける。

- ・国立国会図書館、早稲田大学演劇博物館、明星大学、明治学院大等のシェイクスピア関係の図書等の調査

# 第1段階の研究成果の発表

『日本のシェイクスピア』(エルピス、  
昭和63年2月)

『日本シェイクスピア総覧』(エルピ  
ス、平成2年4月)

日本人が日本のシェイクスピア研究をすることは、ほとんど注目を浴びることはなかった。かろうじて英学史・比較文学の関係の学会で評価されるにすぎなかった。

書誌的研究は日本のシェイクスピア研究の分野上、低い評価しか受けていないのが実状です。これは他の文学の書誌的研究でも同様。

平成3年8月

第5回国際シェイクスピア学会  
東京大会が共立薬科大学で開  
催された。

統一テーマ

「シェイクスピアと文化的諸伝  
統」

# 国際大会で注目を浴びたこと

- ・黒澤明監督の『蜘蛛巣城』と『乱』は日本ではどのように評価されているのか？
  - ・歌舞伎・能・狂言・文楽とシェイクスピアの演劇的接点は？
- 平成3年以降、日本のシェイクスピア研究が専門学会でも特定分野として認められるようになる。

# 第2段階の研究成果の発表(1)

『シェイクスピアと狂言』(共著)(新樹社、平成4年4月)

『講座日本の演劇 日本演劇史の視点』(共著)  
(第1巻、勉誠社、平成4年11月)

『日本シェイクスピア総覧2』(エルピス、平成7年4月)

『シェイクスピア研究資料集成』(高橋康也監修  
／佐々木隆編)(全30巻＋別巻2、日本図書センター、平成9年1月～平成10年6月)



# 第2段階の研究成果の発表(2)

## 主なもの

「日本におけるシェイクスピア受容史」(平成3年)

「日本のシェイクスピア受容の問題点と展望」(平成3年)

「日本の伝統芸能と最近のシェイクスピア劇上演」(平成4年)

「シェイクスピアと映像—日本の状況を考える」(平成6年)

「日本におけるShakespeare映像」(平成7年)

「明治時代のシェイクスピア受容」(平成8年)

「大正時代のシェイクスピア受容」(平成9年)

# 博士論文(論文博士)

「書誌から見た日本シェイクスピア受容研究」  
(学位論文[主論文]、平成13年3月), 1-309頁  
(提出は平成12年3月)

「A Study of Shakespeare in Japan」(学位論文  
[副論文]、平成13年3月), 1-445頁(英文)  
(提出は平成12年3月)

# 博士論文 以後

博士論文で課題として残った部分

- 1) 調査を継続
- 2) シェイクスピア映画研究からシェイクスピア映像研究へ概念の変更
- 3) シェイクスピア書誌からシェイクスピア情報へ(インターネット時代への対応)
- 4) 世界の中の日本のシェイクスピアの意味
- 5) 朗読シェイクスピア、学生によるシェイクスピア劇上演史の整理

# 博士論文以後の発表(1)

『シェイクスピア大事典』(共著)(日本図書センター、平成14年10月)

『シェイクスピア 言葉と人生』(共著)(旺史社、平成15年4月)

『CD-ROM版日本シェイクスピア総覧』(エルピス、平成17年3月)

『日本シェイクスピア研究書誌(平成編)』(イーコン、平成21年4月)

『シェイクスピア名セリフ集』(共著)(朝日出版社、平成25年1月)

『江戸時代のシェイクスピア受容』(イーコン、平成25年10月)

『日本シェイクスピア研究書誌(江戸時代編)』  
(イーコン、平成25年12月)

# 博士論文以後の発表(2)

## 主なもの

「シェイクスピアと国際化」(平成14年)

「シェイクスピアと文化交流」(平成14年)

「国際コミュニケーションとしてのシェイクスピア」(平成15年)

「情報文化時代における日本シェイクスピア書誌の一考察」平成18年)

「「文化交流」を考えるーシェイクスピア劇上演を例にして」(平成18年)

# 博士論文以後の発表(3)

## 主なもの

「最近の『シェイクスピア事典』の一考察～情報社会のシェイクスピア」(平成19年)

「演劇に見る伝統と新しい時代の流れーシェイクスピア劇上演を例にして」(平成20年)

「異文化理解から見た明治時代のシェイクスピア受容の一考察ー坪内逍遙を中心にー」(平成21年)

「書誌から見た『近松門左衛門とシェイクスピア』比較研究」(平成23年)

「グローカリゼーション時代のシェイクスピア」(平成23年)

# 博士論文以後の発表(4)

「書誌から見た明治移入期のシェイクスピア受容史に関する一考察―「新約繁昌記」の意味していたもの」(平成24年)

「日本シェイクスピア書誌の行方」(平成24年)

「埋もれていた*The Nagasaki Express*のシェイクスピア」(平成24年)

「日本におけるシェイクスピア原語上演の一考察―大学の果たした役割―」(平成25年)

「狂言の多様化―シェイクスピア狂言について」(平成25年)

「シェイクスピア狂言・片山博通『二人女房』に関する一考察」(平成25年)



# 博士論文以後の発表(5)

「シェイクスピア狂言の初演を巡って」(平成25年)

「シェイクスピアと日本の伝統芸能」(平成25年)

「能楽事典から見たシェイクスピア能・狂言」(平成25年)

「ハムレット映画『炎の城』について」(平成26年)

「Shakespeare Reception Studies in Japan: A Brief Historical Survey」(平成26年)

# 佐々木のスタンス

シェイクスピアの変容を受け入れていく立場。

音楽、絵画、バレエ、オペラ、  
ミュージカル、講談、落語、能、  
狂言、歌舞伎、日本舞踊、マンガ、  
現代版への翻案、改作等

# 博士論文の構成

具体的な内容はハンドアウトで説明  
致します。

研究指導教授

博士論文 構想

博士論文 提出